

健全な男女共同参画社会をめざす会

正しい男女平等とは

[トップ](#) [入会のご案内](#) [会報](#) [活動内容](#) [リンク集](#) [お問い合わせ](#)

[会報一覧に戻る](#)

なでしこ通信 13号

なでしこ通信 目次

第13号

○二周年を迎えた私たちの足跡
会長 小笠原ミワ子



○まっとうな日本人を育てる講演会開催さる

○朝日新聞顛末記

○会員エッセイ「夫婦の絆」 斎藤孝恵

健全な男女共同参画社会をめざす会 H18・10・1

なでしこ通信 第13号

二周年を迎えた私たちの足跡

健全な男女共同参画社会をめざす会 会長 小笠原 ミワ子

二年前、日本中にはまるで奔流のような「男女共同参画への流れ」がありました。それは私たちの気づかないうちに足元に忍び寄り、またたく間に道路や庭を沈めたかと思ううちに、玄関から床上を浸す唐突な浸水に似ていました。

ちょうど教科書問題や歴史認識をめぐる議論に目を奪われていた私たちにとって、それはまさに「晴天の霹靂」、いえ瞬時に足元をすくわれた鉄砲水のようにも思われました。

国に基本法ができるやいなや都道府県・市町村に次々と条例が作られていきました。しかし、当初私たちはこれら条文にちりばめられた耳あたりのいい文言に油断し、のちにこれが日本の進路を誤らせる大きな禍根になるとは見抜けませんでした。返す返すも残念なことだったと思えてなりません。その心配どおりこれらの法や条例が具体化されるにつれ、大きな違和感が全国に広がっていったのです。夫婦は別姓であるべきだ、男女の区別は差別につながる、奥さん・旦那さん・お嫁さんなどといったはいけない、ひな祭りや鯉のぼりにも男女差別を嗅ぎ取らねばならない、男らしさ・女らしさは個の可能性をせばめる、小学生にも性交のノウハウを教えるべきだ、等々。

この、あまりに常軌を逸した主張や教育がまかり通るに至り、心ある方々は男女共同参画という言葉が文字通り「男女平等」や「男女の性差尊重」を意味するのではなく、実は家庭や伝統文化、社会規範を破壊せんがための美名にすぎないということに気づくようになりました。このままでは長い年月かかって培われた人と人との大切な絆が断たれてしまう、地域や家庭、国といった有機的なまとまりが崩れてしまう、子どもたちが自分を位置づける世間や歴史という

座標軸を失い、心をさまよわせることになってしまう、何とかしなければ... という声が津々浦々に起こってきました。愛媛からもその声を上げよう、という思いを持つほんの数名から生まれたのが私たちの会です。

それから二年。学習会や陳情など地道な活動に取り組む中でしだいに仲間の輪が広がっていき、いつしか五百名を超える会員の皆様に支えられる市民団体となりました。また、先日は四回目の講演会を盛会のうちに終えることができ、その動きはマスコミにも取り上げられました。

私たちは女性の社会進出や自己実現に反対するものではありません。女性の活力はこれからの社会にいつそう必要になることでしょう。またセクハラやDVから女性を守る必要性にも賛意を表すものです。しかし、男女の特性を無視し、その中性化を意図するいわゆる「ジェンダーフリー」にはつよく反対します。この点については近年、政府も愛媛県も「男女共同参画とは機械的な男女の中性化を目指すものではない」という見解を出し、明確にジェンダーフリーを否定するようになりました（さらに今回発足した安倍内閣では、ジェンダーフリー思想に異議を唱えてこられた高市早苗氏が男女共同参画担当大臣となり、この動きは定着したと言っていいでしょう）。また最新の脳科学も男女の差を生得的なものとはっきり位置づけるようになっていきます。



私たちに反対する人々はこのような動きを「バックラッシュ（反動）」と名付け、警戒を強めているようです。しかし、良識を無視して極端な方向に振れきった振り子を元に戻そうとする努力はふつう「正常化」とよばれるべきものではないでしょうか。特定の思想を原理的・教条的に解釈し、永い年月をかけて先人達のはぐくんできた男女の文化やその理想型を洪水のように押し流そうとする文化大革命的風潮が、決してわれわれを幸せにするとは思えません。たとえて言えば、私たちは数百年間風雪に耐え、村を見守ってきた巨樹を、高速道路を通すのに不便だから、とい

う理由でいとも簡単に切り倒してしまうようなまねをするでしょうか。どのような美しい言葉も、それが現実の生活に不調和や抵抗、世代間の対立や価値観の混乱を招くようでは、その値打ちを疑われても仕方ないでしょう。

私たちは地域に生きる一人として、県や市町が調和のとれた男女共同参画を広めることを期待しています。理性や常識から見て違和感のない男女平等の社会を望む気持ちを「健全な」という会の名に込めたつもりです。ところが先日、ある新聞紙上に「男女共同参画に反対している団体の行事（注～私たちが主催した講演会）を県や県教委が後援するのはおかしい」という不思議な批判記事が掲載されました（4・5ページ参照）。

先に述べたとおり、行政自体もバランスのとれた共同参画の道筋やあり方を模索している最中なのです。もちろん私たちの会と県との考え方に温度差があることは承知しています。しかし、同じ男女共同参画という土俵ならばその中で論議を深めていこう、市民の声に耳を傾けていこう、という県の柔軟な姿勢はそれほど非難されなくてはならないことでしょうか。私たちはむしろ素直にその懐の深さを歓迎しました。しかしジェンダーフリー派の方々は、私たちと行政がわずかでも結びつくことをおそれ、悲鳴のような告発記事にしたのです。ある会員はこれを読み、「まるでケンカで負けそうな子どもが先生や親に言いつけにいったようなもの」と苦笑しましたが、自分たちと異なる意見を持つ相手に対して正面から立ち向かわず斜に構えるその報道姿勢は、確かに似てなくもありません。

私たちは市民団体として、行政に対し言うべき事はきちんと言い、同時に評価できることに対してはできる限りの協力をしていきたいと思っています。また、私たちをバックラッシュ派と決めつける人々に対しても、説得を続けようと考えています。

私たちにとってこの二年間は試行錯誤、手探りの時代でした。その中で濁流が

しだいに引き、田畑や道路が再び顔を見せてくる今日の状態を迎えました。けれども、一度水に浸かった家財の“復旧作業”にはまだまだ時間と手間がかかりそうです。どうか今後も皆様のご協力をお願いいたします。

■9月24日（日）午後2～4時

■愛媛県女性総合センター

■講師 豊岡中央病院理事長 田下 昌明先生

親子連れもおおぜい訪れました。会場には講演のポイントを掲示。わかりやすかった先生のお話。子どもたちから花束の贈呈。参加した皆さんも熱心。閉会

あいさつ（村上顧問）

◇十ヶ月と三歳の子どもを育てているので、納得しながら聞かせていただきました。上の子を妊娠している際に読みあさった本の内容なども思い出しました。息子たちは‘だっこだっこ’といつもせがむので十分だっこしてやろうと改めて決意させられました。

◇母性愛・父性愛の違いや（赤ちゃんに）生後一時間までにすること等々、非常に良いお話でした。自分の子育ては終わりましたが、「孫育てが終わるまでが子育て」とのこと。ありがとうございました。

◇私も子どもを母乳で七人育てましたが、知らずに育てた子より、いろいろ知識を得てからの子どもとはちがいます。先生の言われたことは事実です。子や孫に生きている間伝えてあげたいと思っています。

◇子育てのため今後も分かりやすいメッセージをお願いします。悲しいかな母のいない家庭となっている友人が多くいます。母性と父性の差違は分かりましたが、彼らはどうすればいいのか。また新しいメッセージを発信せられますようお願いします。

◇妊娠六ヶ月の姪への大きなエールを送ることが出来そうです。早速本を買い求め送ってあげたいと思います。

講演会は産経新聞にも取り上げられました。

[H18・9・25産経新聞・愛媛県版]



*****朝日新聞顛末記*****

9月23日付の朝日新聞（愛媛県版）の記事につきましては、週刊愛媛経済レポート（10月20日発売）やチャンネル桜報道ワイドなどで取上げられております。以下はめざす会が直接、同新聞社の記者から取材を受けた顛末です。〔文責・事務局青井美智子〕

9月20日水曜日、私達は講演会の準備のため集合することことになっていました。会長が「朝日新聞の記者から電話があってなかなか切れないので気が気じゃなかった」と駆けてきました。記者は「めざす会の考え方と愛媛県男女共同参画推進条例の考え方は異なっている。それなのにめざす会の講演会を愛媛県（子育て支援）や愛媛県教育委員会が後援するのはおかしい。」と言っているとのこと。

これに対し会長は「県や教育委員会に後援を申請するに当たっては、今回の講演会の実施要綱案から、めざす会が発足して以来の活動歴や役員名簿、規約などを提出してます。後援はそれらをもとに県がお決めになったことですから、それを私達に『おかしい』と言ってくる方がおかしいではありませんか」と回答しました。また、めざす会は「男女共同参画が伝統を壊す」と

言っているが、伝統とは何か？とも聞かれたとのこと。例えばお節句のような行事、と会長が答えると、記者は「条例にはそういうものを禁止したところはない」と反論したそうです。「条例の行間が読めないのかねえ」とは会長の談。

ところが翌日、朝日の記者からめざす会に取材の申し込みがありました。22日（金）に松山市内の喫茶店で記者に会い、30分話を致しました。

開口一番、記者は「1週間前にこのちらしを見て、この講演会を
県が後援しているのは問題だと思った。ちらしには「『母子一体
感』は子育ての原点であり、人間形成の出発点でもある、と書い



てある。しかし父子家庭もあるのだから、こういう内容の講演を県が後援するのは無理がある」と言われました。子育ての一般的な原則を述べることは、決して例外を大切に扱わないということではありません。母子関係について一般的に述べることと、父子家庭をないがしろにすることは別です。むしろ「父子家庭はどうすればいいのか、そういうことにも触れてくれるのですか」と聞いて下さればよかったと思います。子どもには必ず母親がいま

す。離婚を減らし、父子家庭を極力作らないようにすることが大切と私たちは考えます。

また、記者はこうも言われました。「今回は県を批判する記事を書くが、ここにあなたたちの活動や講演会のことも書いてあるので、見て驚かれないように事前に言っておきたかった」、と。私達は朝日新聞がめざす会について何を書かれようとも、それが突然であろうとも、驚きはしません。信念をもってこの活動をしています。

記者は「自分はめざす会に、講演会をやめよ、とか、するな、とか言うつもりはない」とも言われました。普通こういう言い方は、命令や要求をする権利・資格はもっているけれどもそうはしない、という意味だと思います。そういう権利も資格もない人がそれをいうということは、理解に苦しみます。さらに記者は「子どもをつくる」という表現を何度も使っておられました。人間が子どもを欲しいときに欲しいだけ「つくる」ことができるのであれば、子どもができなくて悩む夫婦はいないでしょう。子どもは親を通して祖先から受け継いだ命を次に繋いでいけるように天から「授かる」ものではな

いでしょうか。

男女共同参画は、女性も男性同様に給与のある仕事をし、従来女性が主であった家事・育児を男性が分担して受け持つことを奨励しています。しかし、男性にしても女性にしても、仕事と家事・子育ての両方を完全にしようとするのは無理があり、両方が中途半端になるのではないのでしょうか（たまたま見た「渡る世間は鬼ばかり」で子持ちの女医〔注～愛媛県男女共同参画学習ガイドブック20頁で禁止されている表現です〕が子育てと家事をしながら職探しをしなければならない身を歎いていました。妻が生活の基盤である家庭をしっかりマネージメントし、子どもにはたっぷり愛情を注ぎ、夫が安心して外で一生懸命に働くという構図こそ奨励されていいのではないのでしょうか）。私達自分自身の幸せのためにも、性別役割分担の優れた意味を考えてみるべきでしょう。

朝日の記事には、「『父親も母親も同じ育児』は育児の大原則からはずれています。母子が安心できる環境を作る...これが父親の重要な仕事」「『母子一体感』は子育ての原点であり、人間形成の出発点」と書かれ...」という講

演会のちらしが紹介されていました。読まれた方の中には、これは実にまっとうな考えであり、それがないがしろにされている方が問題だ、と思われた方もいたでしょう。ところが取材を受けたにもかかわらず、私たちは会や代表者の名称はおろか、講演会の会場や時刻、講師名すら載せられませんでした。どちらの言い分が納得いくものであるか、客観的に読者にその機会を与えてもよかったのではないのでしょうか。一方、反対団体はふたつともしっかりと名称や役員名が載っていました（そのひとつ「『県の後援はおかしい』と指摘」した渡部典子氏が事務局長を務める「I女性会議愛媛県本部」は、会員がほとんどいらっしやらない会のようなのですが...）。

また記事には、日本ジェンダー学会副会長・伊藤公雄氏の「公的機関が後援するにはちょっと古い発想で、偏った内容」というコメントも掲載されています。



日本人は古来、お腹に子どもが宿った時点で零歳（産まれたとき一歳）と数えました。私が子どもの頃は、齡を聞かれると必ず

「満で何歳、数えで何歳」と言ったものです。妊娠した段階で一人の人間と認めるということは素晴らしい胎教であり、今日ふうに言うならば人権教育の第一歩と言っていい考え方ではないでしょうか。また生まれてからは、「三つ子の魂百まで」「しっかり抱いて下に降ろして歩かせる」という育児の知恵を凝縮した表現もあります。

敗戦のショックで日本人が忘れかけてしまった日本的な子育ての思想は、今皮肉なことに海外で高い評価を受けつつあります。また母乳やだっこ、子守歌といった伝統的な育児方法が、実は極めて脳や神経の成長にかなっていることを最新の科学が証明しつつあるのです。賃金獲得のため女性を子どもから引き離そうとする男女共同参画の誤った理解こそ、経済至上主義・金銭万能主義という古く偏った考え方ではないのでしょうか。

会員エッセイ **夫婦の絆** 齋藤 孝恵 [松山市在住]

「このままだと手術をしても4ヶ月位しか生きられません。それでも手術をしようと思うのなら1日も早く入院するように。もう手遅



れの胃癌です。よくご主人と相談して下さい。」

と医者に言われたのは7年前のことです。頭が真っ白になりました。手術をしてもしなくても4ヶ月の命なら、人間は一度は死ぬ、いつが死なのか、それは寿命にまかせ、どうなろうとも手術をして頂くことに主人と相談して決めました。病は気からです。病に打ち勝とうと強い決意を持ったのをはっきりとおぼえています。

手術の日、主人は私の手をギュッとにぎり、一言「待っている」。私はこらえていた不安が大つぶの涙となってほほをつたわりました。

手術も無事終わり目がさめた時、生きている、生かされている、と感じました。見守る友人の顔、家族の顔を思い浮かべ、たくさんの恩を感じました。

我を苦しめるも我が心、我も救うも我が心です。主人は「お前が世話した花が咲いていたから」「美味しそうな果物が目についたから」「無理せずにね」と毎日見舞に来てくれました。その主人のほほが少しずつやせてきて、言葉にはしないがどんなに心配してくれているか気付きました。

普段はお互いに居るのがあたりまえで言葉にはだしませんが、ありがとう、

とお互いをおもいやる絆を感じました。無事退院ができ、主人の思いやりで不思議なぐらい順調に快復しました。医者と言われるまま通院し五年がすぎ、もう心配ないと医者に言われたことから、私は有頂天になり、喉もとすぎれば暑さを忘れているのではないが今まで考えて食べていた食事、毎日の生活習慣がふとゆるみ、心もゆるみはなしになったのです。そんな時異常なまでの疲れに気付き、検査に行きました。今度は大腸癌です。一度ならず二度までも癌なのか...

また主人に心配をかけるのは申し訳ないと思いました。人間は一生の間で、たくさんの病になりますが、死は一度だけ、寿命が来るまで生きられます。



今年の五月末に大腸癌の手術をし、現在順調に快復しており、一日でも早く元気になり主人に安心して頂けるように、そして少しでも社会に貢献できればと思っています。

■□□事務局からのお知らせ■□□

■9月24日（日）の田下先生の講演「まっとうな日本人の育て方」は多くの小学校の運動会と重なりましたが、お陰様で210名の方がご参加下さいました。日本会議愛媛県本部の久松定成会長ご夫妻や、県議会議員の横田弘之先生、渡部浩先生、松山市議の若江進先生、大亀泰彦先生、今治市議会議長の寺井政博先生らの来賓をお迎えすることができました。講演テープは送料込みで500円で販売中でございます。サイン会ではご著書が早々に売り切れてしまい申し訳ありませんでした。出版社では重版が決定、間もなく店頭でお求めいただけます。また、今回の大好評にお応えして来年再び田下先生においでいただくよう交渉中でございます。ご期待下さいませ。

■月2回めざす会学習会を開催しております。日時や会場は事務局までお問い合わせ下さいませ。

■会員になられて1年が経過する方には振替用紙を同封しております。更新の時期にご家族やご友人にもご入会いただけますようお願い致します。年会費はおひとり1,000円でございます。

健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 小笠原ミワ子

〒790-0931松山市西石井1-3-30

電話090-3181-4004 FAX 089-964-3903

メール t64r59@bma.biglobe.ne.jp

Copyright © 2009, 健全な男女共同参画社会をめざす会, All Rights Reserved.